

演題番号：C10

血液浄化装置 TR-2020 を用いて間欠的血液透析治療を行った急性腎障害の3例及び血漿交換を併用した免疫介在性溶血性貧血の1例

○田中遼一郎，駒田雄輝，大谷豪，多田裕治，作野幸孝

奈良動物医療センター

1. はじめに：血液透析(HD)は、様々な原因による急性腎障害において腎代替療法として実施される。また、血漿交換(PE)は免疫介在性疾患などで病因物質の除去を目的に実施される。いずれも標準治療への反応が乏しい症例にとって有効な治療手段となる。小動物領域では動物用透析装置NCU-A(リーフインターナショナル、東京)が一般的に使用されているが、当院ではヒト医療用多用途血液浄化装置TR-2020(東レメディカル、大阪)(以下、浄化装置)を採用した。本発表では浄化装置を用いて間欠的血液透析(IHD)を行い状態が改善した3症例とPE、IHDを併用して治療を試みた1例を報告し、その臨床的有用性を検討する。

2. 材料および方法：症例1はジャパニーズ・ボブテイル、8歳齢、避妊雌、体重5.2 kg。慢性腎臓病の急性増悪と診断され無尿であった。症例2はトイ・プードル、13歳齢、避妊雌、体重4.4 kg。他院にて急性腎障害として治療中であったがセカンドオピニオンで来院。症例3は雑種犬、8歳齢、未避妊雌、体重3.8 kg。当院での子宮蓄膿症の術中に心停止。術後、DIC、多臓器不全への移行が疑われた。症例1-3は顕著な高窒素血症または高カリウム血症を認めたため、急性期治

療として1-2回のIHDを実施した。症例4はビーグル、7歳齢、去勢雄、体重15.5 kg。免疫介在性溶血性貧血(IMHA)に併発した高ビリルビン血症(最大43.1 mg/dl)に対しPE1回、IHD2回を実施した。

3. 結果：症例1-3のIHDは1回4-6時間で実施、尿素減少率(URR)は48-72%であった。いずれも明らかな不均衡症候群は認められず、状態は改善、それぞれ入院13-16日目に退院し、その後66-402日生存している。症例4ではPEにより20%、IHDにより13%のビリルビンの低下を認めたが、入院11日目に斃死した。死因として心原性肺水腫が疑われた。

4. 考察および結語：今回の浄化装置を用いたIHDは過去の報告と同等のURRを達成しており、ビリルビンの除去にも有効であった。加えて自己抗体の除去にも効果的なPEを同一機器で実施でき、治療反応性を評価する猶予期間が得られたことは、犬、猫における浄化装置の有用性を示唆している。しかし、小動物でのPEは報告も少なく、今後のさらなる症例の蓄積が必要と考える。